

## 一休さんの戯れ

辻 憲男（文学部教授）

「このはしわたるべからず」にはこんな前段があった。先頃この檀那（信者）が寺に皮のハカマをはいて来た時、小坊主の一休が「皮の類禁制なり。入れば必ずばち当たるべし」と書いた札を立てた。檀那が「ならば、寺の太鼓の皮は何とする？」と返したので、一休「さればよ夜昼三度ずつ、撥（ばち）を当てております」とおどけたのだ。寺の時報である。

次にお膳になま臭い魚が出たが、一休はひたすら食った。それを皮肉られたので、「口は街道のようなもの、貴賤の別なく通ります」と答えた。檀那は刀を抜いて「こんなものも通るか」とつめ寄る。一休少しも動じず「敵か味方か」と問う。「敵だ」と言うと「通さぬ」と言う。「いや味方だ」と言うとケヘンケヘンと咳をして、「いま急に関！が据えられました」。

後半生、応仁の大乱前後を強烈に生きた。とんち話は後人の創作が多い。皇子さまながら京に留まらず、諸国を風狂行脚した。漢詩を多作し、禅僧の退廃をののしった。湖西堅田や泉州堺に住み、63歳で山城の酬恩庵に入った。大阪住吉社で盲目の美人・森（しん）に出会い、互いに心ひかれた。十年ほどして再会し侍者に迎えた。一休78歳、森30歳代か。それからの十年間は蜜月のような、深い愛情に埋没した晩年であったという。

「つぎねふ山城道を 他夫（ひとづま）の馬より行くに 己夫（おのづま）し歩（かち）より行けば…」というのは、万葉集の歌謡。ああ可哀想に、わが夫は歩いて通勤するよ。母の形見の鏡を売って馬に換えよう、と妻は思う。木津川沿いの古道は今も人影まばらな、坦々とした一本道である。



酬恩庵一休寺の庭園。京都府京田辺市新（たきぎ）。